〈論　文〉

月を詠まない姨捨山の歌

西山秀人

はじめに

姨捨山は信濃の代表的な歌枕であり、その所在については諸説あるものの、長野県千曲市と東筑摩郡筑北村にまたがる冠着山を比定する説が有力である。現存最古の用例としては、『古今集』巻十七・雑上所載の、

わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て[1]　（八七八）

が挙げられ、以後、姨捨山を詠む場合は、この歌を踏まえつつ心慰まないことを詠むというのが一般的であった。『大和物語』一五六段では、信濃の国更級の里に住む男が、妻に唆されて年取った「をば」を山に捨てたが、その後、月を見ながら後悔の念に苛まれ、上掲「わが心…」の歌を詠じて「をば」を連れ帰ったという棄老説話に仕立てられているが、「それよりのちなむ、をばすて山といひける。なぐさめがたしとは、これがよしになむありける」という結びは、上掲歌を軸に本話が作られたことを示唆しているようにも思われる。後年、『更級日記』の作者が、老残の日々を送る中、久方ぶりに甥の来訪を受けて詠じた「月も出でで闇にくれたる姨捨になにとて今宵たづね来つらむ」は、先の姨捨伝説を踏まえた一首とみてよいだろう。

しかし、和歌の世界では姨捨伝説とは無関係に、姨捨山を純粋に月の名所として捉えた歌のほうが多い。例えば、

さらしなにやとりとるたひゝとあり
さらしなにやとりはとらしをはすての山まてゝらせあきのよのつき（忠見集Ⅰ三三）
をはすて山

秋の夜の暁かたの月みれは　をはすて山そおもひやらるゝ

（信明集Ⅰ三三）

の二首は村上朝の屏風歌であり、『信明集』の詞書「天暦八年中宮七十賀御屏風のれうの和歌」に従えば、天暦八年（九五四）に予定されていた太皇太后穏子穏子七十賀の屏風料歌として詠進されたものと推測される。もしも、姨捨山が棄老の地であるというイメージが定着していたとすれば、算賀という晴れの儀式に用いる屏風絵の画題に選ばれるはずはないだろう。(2)

『大和物語』を嚆矢とする姨捨伝説とは別に、姨捨山は一〇世紀前後には月の名所としてもその名を馳せていたとみられ、後世においても「月とは不可分な名所」(3)として和歌や俳諧に詠み継がれていくことになる。落合博志氏(4)が指摘するように、姨捨山が棄老という悲惨なイメージを伴いながらも、「何故一方で月の名所として」「美しく澄む月が詠まれたのかは考えるべき課題である」が、同じ信濃の歌枕でも、たとえば、園原・伏屋は、

おなし少将とふして、さう□□しくもあるかな、女かたをきたるところやとて人やりたるに、かへりて、あなはらいたとの給ひつる人の、御声なんしつるといへはその原やいかにやましくおもふそもふせやといふもところやはなき（実方集Ⅰ一六〇）

のように、「その腹」「臥せ」の意を掛けるなど、諧謔味あふれる詠まれ方もなされていることを鑑みると、姨捨山詠についても、その名称自体に関心を寄せた歌があってもよさそうに思われる。『後撰集』の、

そのほどに帰りこんとてものにまかりける人の、ほどをすぐしてこざりければつかはしける

こむといひし月日をすぐすをばすての山のはつらき物にぞ有りける（後撰集・恋一・五四二）

は、「をばすて」に捨てられた我が身を寓したものともとれるが、これとて例外なく月を詠み込んでいる。では、月を詠まない姨捨山の歌はあるのだろうか。データベースを検索してみると、少数ではあるが見出しうる。和歌史上では埋もれた存在ながらも、そうした歌々が表現面において興味深い問題を提起していることは注意されてよい。本稿では平安時代の和歌に焦点を絞り、月を詠んでいない姨捨山詠に焦点をあて、その表現分析をとおして姨捨山の和歌史に若干の補足を加えようとするものである。

一、伝統からの逸脱

いったい、月を詠まない姨捨山の歌とはどのようなものなのだろうか。現存初出とみられる和歌用例としては、次掲『定頼集』

所載歌が挙げられる。

或人をとらへてものいふに、おはなる人の立きゝてせいすれは、かへりてあしたにはゝきゝの

①はゝきゝはちかおとりすといふなるをはすて山のみちにいはなん（定頼集Ⅱ三二五）

詞書末尾の「はゝきゝの」は、森本元子氏[5]の指摘に従い衍字とみた上で解すると、ある女をとらえて親しく話をしていると、「をば」に当たる人が立ち聞きして止めるので、帰宅してその翌朝に贈った歌の意となる。信濃国園原にまつわる帚木伝説を踏まえつつ、姨捨山に「をば」「捨て」の意を掛け、「帚木は、遠くからは見えても近づくと消えてしまうと聞いていますが、その帚木のように、あなたに近づくと邪魔が入り、残念な思いをしてしまうようです。今度は「をば」を「捨て」るという姨捨山の道中―おばさんの邪魔が入らないような折にでも、親しくお話してください」と詠んだもので、姥捨山には「をばなる人」への不満が込められている。『大和物語』のような姨捨伝説が背景にあるのかどうかは判然としないが、月を詠まずにあくまでも地名そのものを遊戯的に捉えている点は、既存の姨捨山詠には見られない手法であるといえよう。和歌では耳慣れない「近劣り[6]」の語をあえて用いている点も、①のユニークさを際立たせている。

ちなみに、作者藤原定頼（九九五～一〇四五）は公任の息で四条中納言と呼ばれた人だが、その人柄はやや軽薄で、官人としての適性には欠けていたようだ。だが、芸術的才能には秀でており、美声・能書であったとも伝えられる。和歌においても、斬新な発想・表現が散見され、伝統の枠を越えた詠みぶりに定頼詠の特色を認めてもよさそうである[7]。①の「帚木」は、掛詞としては用いられていないが、定頼詠には他にも「帚木」を詠み込んだ、

はゝうへのほかにわたり給て、人に物いはぬをこなひにて、ひさしうたいめしたまはて、かへりわたりたまひて、けふなむいとまあきたるときこえ給けるに、いそきまいりたまひけるに、人の又御いとまふたかりてときこえけれは、かへり給にけれを、うへはいとまちとをにおほして、かくきこえ給ける

このもとにきても見かたきはゝ木ゝはおもてふせやと思なるへし

御返し

見えかたきはゝ木ゝをこそうらみつれそのはらならぬ身かはとおもへは（定頼集Ⅰ一三二・一三三）

の例が見出される。母（尼君）からの贈歌では三句中の「帚木」に「母」を、四句中の「おもてぶせや」には不名誉の意の「面伏せ」と、信濃国園原にあるという「伏屋」を言い掛けたのに対し、定頼の返歌は贈歌同様「帚木」に「母」を、地名「園原」に「その腹」の意を掛けて応じている。こうした機知あふれる詠みぶりが、上掲①の姨捨山詠にも反映されたものとみておいてよいだろう。

定頼とほぼ同世代の歌人で、姨捨山の地名を掛詞として用いた人物としては、他に能因がいる。

いまのをとこのせきもりありけりなといひたるに、又かはりて

②おはすてのやまとなりにし我なれはいまさらしなに関守もなし（能因集Ⅰ四四）

右歌の直前に置かれた四三番歌と同様、ある女のための代作歌とみられる。詞書中の「いまのをとこ」について、川村晃生氏[8]は四三番歌詞書[9]にある「たえてとはぬ男」と同一人物とするが、平野由紀子氏[10]は「新しい男」とみる。本文には「今の」とあることから後説に従い一首を解すと、新しい男が「関守」すなわち見張りがいて逢いに行けないと言ってきたので、「更級の姨捨山というその名のとおり、あなたに捨てられた私なので、今さら関守―見張りなんていませんよ」と返した歌ということになる。「をばすて」の「すて」に男に捨てられた意を込め、姨捨山を女自身の比喩とするほか、「いまさらしなに」に「いまさら」と「更級」を言い掛けた機知あふれる詠みぶりで、①の定頼詠に通じるものがある。姨捨伝説を踏まえているかどうかは即断できないが、仮に「をばすて」に棄老の意を込めているとすれば、上句は「あの姨捨山の話のように、年老いて捨てられた「をば」のような私なので」の意となり、「をばすて」に男への皮肉を精一杯込めたものと解されよう。

『能因集』には姨捨山を詠んだ歌が、他に三首見出されるが、いずれも、

ある所にある女、さくらのちるを見て、ものおもへるさまにて、かくいふ

（うき身をはなくさめつるに桜花いかにせよとかかくはちらん）（Ⅰ六六）

これをきゝて

aおもふことなくさめけるはさくら花をはすて山の月にかも（Ⅰ六七）

女、かへし

bをはすての山をはしらす月みるはなを哀ます心地こそすれ

（Ⅰ六八）

九月十三夜の月を、ひとり望月詠之

cさらしなやをはすて山に旅ねしてこよひの月をむかし見し哉

（Ⅰ二一三）

のように月が詠み込まれており、②のような技巧性はうかがい得ない。aの歌では前引の古今歌に倣って「慰む」を詠んでおり、cは能因が昔、姨捨山の月を実見した可能性[11]があることを示唆しているが、こうした詠みぶりは明らかに②とは一線を画している。②をはじめa・bは能因出家前の作とみられるが、②の歌作態度が他の能因詠と異なっているのは、やはり代作であることに起因するものではなかろうか。なお、「いまさらしなに」の掛詞表現については先行例を探せず、あるいは、川村・平野両注が挙げる『古今六帖』の、

今さらにさらしな川のながれてもうきかげ見せん物ならなくに（三・川・一五三六）

から着想を得た可能性もあろう。

ところで、②のように「更級」を掛詞的に詠み込んだ例として、近いところでは赤染衛門の、

女院左近の命婦に、のりたゝすみしを、めいの少納言のないしにうつりたりと聞て、のり忠にやりし

dまことにやおはすて山の月はみなよにさらしなのあたりと思ふに（赤染衛門集Ⅰ五七一／後拾遺集・雑四・一〇九一）

が挙げられる。この歌は月を詠み込んでいるため①・②とは同列には扱えないが、技巧面においては①・②の手法を踏襲したものとみてよさそうである。上東門院彰子に仕えていた左近命婦と同棲していた義忠が、命婦にとって姪にあたる少納言内侍に心変わりし、そちらへ移り住んでしまったと聞いて詠み贈った歌で、「本当でしょうか。よもや離れることなどあるまいと信じていたのに、「をば」の命婦を捨てて姪のもとに走ったという噂は」と、義忠の裏切りを詰っている体である。「姨捨」には「をば」を「捨て」る意を、「更級」に「去らじな」[12]の意を掛けている点は上掲①・②の詠みぶりに通じるものがあろう。さすがは「平明ながら臨機応変の歌詠をなす」[13]とされる赤染衛門の歌であるが、「姨捨山の月」を詠み込んでいるあたりは伝統へのこだわりを感じさせる。

二、院政期の和歌

月を詠まずに「姨捨」「更級」の両地名を技巧的に詠むという手法は、②の能因詠を経て、院政期に至ってようやく一技法とし

て認知されるようになる。

ちきりしこと、もをわすれにけるにや、ことさまに思也にけり、ときこゆる人のかりつかはしける

③契りをきしことをはすての山なれとよもさらしなとなをたのむ哉（散木奇歌集・俊頼Ⅰ一三七一）

しなのなりける女をいひかたらへりけるをとこ、京にゐてのぼりてこと女をかたらひてとはずなりにければ、女のいひつかはしける

④しなのなるよもさらじなと思ひしをわれをばすての山のはぞうき（続詞花集・恋下・六三四）

e人ことによもさらしなとおもひしをきくにはまさるをはすての月（清輔集・一三九）

③は、契りを交わした女から不実を責め立てられ、何とかして女の怒りをなだめようと詠み贈った歌とみられる。「あなたと約束しておいたことを、自ら反故にしてしまった私だが、もう二度と離れることはあるまいよ。やはり、あなたのことを頼みにしているのだよ」と、不変の愛情を誓うが、第四句にみる「よも去らじな」[14]―更級」の掛詞表現は、上掲dから着想を得たものではなかろうか。dは『後拾遺集』にも採られており、俊頼は当然dの歌を知っていたはずである。右の掛詞表現に加えて、上三句「契りおきしことをば捨て」に「姨捨の山」を言い掛けたところが俊頼ならではの工夫といえようか。第二句「ことをばすての」の表現形成に際しては、おそらく、

うかりけるふしをばすててしらいとの今くる人と思ひなさなん（拾遺集・恋四・八九九・貫之）

すき、にしほとをはすて、ことしよりちよはかすへむすみよしのまつ（能宣集Ⅰ一九四）

たらちめのをやをはすて、こはいかに人のこをのみ思ふ我こそ（伊勢大輔集Ⅰ一〇八）

などのように、第二句に「Aをば捨てて」を据えるという先蹤詠の表現をアレンジしたものと思しいが、こうした俊頼歌の技法は後述する④においても踏襲されている。

ちなみに、俊頼は他にも姨捨山の歌を残しているが、

歓喜の御頂におはしますあみた仏をかみたてまつる事をよめる

峯たかきおはすて山の木末よりさしいつる月の光をそみる

（散木奇歌集・俊頼Ⅰ九三九）

ことのついでありけるにさらしなをよみける

⑤さらしなはをば捨山のふもとにて　いかでみやこに名をとどむらん（同・一三八〇）

のようで、⑤については月を詠んでいない。⑤は姨捨山の麓にあたる更級の地名が、どうして都ではこれほど有名なのだろうかと訝しんだものである。この歌は『散木奇歌集』では③の次に置かれているので、何か寓意が込められているのかもしれないが、名所に対する歌学的な興味を直叙しているともとれる。

④は清輔撰の『続詞花集』に採られた歌だが、先に述べておくと、この歌と同工異曲ともいうべき作が「登蓮恋百首」に収められている。

⑥さらじなど契りしものをかひもなく我をばすての山のはぞうき（登蓮恋百首・六三）

一首の技法はもとより、下句に至っては④と完全に合致していることから、両歌の間に受容関係があったことはまず間違いないであろう。もっとも、「登蓮恋百首」の成立は永万元～二年（一一六五～六）以前、『続詞花集』も永万元年七月の二条天皇崩御の前後[15]と推測されていることから、その先後関係は俄に判断しがたい。

さて、④は信濃在住の女と懇ろになった男が、その女を連れて上洛したものの、他の女と親しくなって訪れなくなってしまったので、信濃出身の女が男に詠み贈ったものである。「信濃に住んでいる折は、決してあなたが離れていくことはあるまいと思っていましたが、あなたは私を捨ててしまったので、私は姨捨の山の端に沈む月のように辛い思いをしていることです」と、男の裏切りを嘆くが、③と同様「よも去らじな[16]」に「更級」を、「（我）をば捨て」に「姨捨の山」を言い掛けている。③との先後関係は不明であるが、両歌の間には何らかの影響関係を認めてもよさそうに思われる。③と異なるのは「山の端」に月を暗示させている点で、前章に引いた「こむといひし月日をすぐすをばすての山のはつらき物にぞ有りける」（後撰集・恋一・五四二）などを念頭に置いた上で、女自身を「山の端」に喩え、月が沈むまで男の来訪を待ちわびる日々を過ごしている状況を「憂き」としている。月を詠まずに、言外に月の存在を暗示し、伝統的詠法にも配慮した点に、趣向の深さがうかがわれよう。

清輔詠のｅは月を詠んだものだが、永暦元年（一一六〇）秋の開催と目される法性寺忠通家月三十五首会への詠進歌と目され、

「世間の評判を聞いて、決してそんなことはあるまいと思っていたが、聞きしにまさる姨捨山の名月だよ」[17]と、あたかも姨捨山の月を実見したかのような詠みぶりである。やはり③・④と同様「よもさらじな」に「更級」を掛けているが、ここは「去らじ」ではなく、芦田耕一氏[18]が指摘するように「然らじ」の意に解すべきであろう。清輔が歌道の先達たる俊頼に対して敬愛の念を抱いていたこと[19]を鑑みると、俊頼詠③から何らかの影響を受けているのではないかとも考えたくなる。また、『続詞花集』が清輔の撰であるという事情をも考慮すると、④との摂取関係も想定されようか。e・④ともに「思ひしを」を三句に据えている点は気になるところである。

このように「をばすて」「さらしな」に施されたレトリックを辿っていくと、時代とともにその用法が固定化していくことが看取されたかと思う。伝統的詠法に拘泥せず、当意即妙の歌づくりの中で生み出された詠法が後代の歌人たちに摂取され、さらに洗練度を加えていくことにより、結果的には類型化の様相を呈していくのは致し方のないところではあろう。月を詠まないというのは、当時としてはある意味画期的な詠法であったが、④のように「山の端」の語を詠むことで入り方の月を暗示させるなど、月の名所というイメージを完全に払拭することはできなかった。月を詠み込んだ清輔詠eは、レトリックへの関心を抱きながらも、結果的に伝統の枠の中に取り込まれていったということになろう。

三、新古今集時代へ

姨捨山詠にみる上述のレトリックは、後続の和歌においても踏襲されていくことになるが、新古今集時代に至るまでの歌作中、月を詠んでいないのは、

⑦あきのよはよもさらしなと思しにをはすて山に雲のかゝれる

（拾玉集・慈円Ⅰ一三五一、花月百首・月五十首）

などを見る程度である。[20]「よもさらしな」に「よも去らじ」と「更級」を掛けるという手法は先行詠に倣ったものであろうが、「秋の夜は、更級の里で名月を鑑賞しようと思って、決してここから離れまいぞと待っていたところ、姨捨山には雲がかかってしまっている」と、月を詠まずに月の存在を暗示する内容となっている。このような趣向は、

⑧鐘のをとをともとたのみていく夜かもねぬはならひのをはすての山（拾玉集・慈円Ⅰ二六四五、日吉百首・花）

⑨いかにせんをはすて山の嶺の雲よ花成けりな春の明ほの

（同・四二〇一、山居春曙）

⑩松風にうきたる雲をはらはせて暮行空はをはすての山

（同・四八〇〇、待月）

など、『拾玉集』の用例が目立っていることから、慈円が好んで用いていたのであろう。その一方で慈円は、

fをはすての山より出る月を見て　今さらしなに袖のぬれぬる

（同・三七二九、詠百首和歌・月）

g月出でばよも更科の夜半の空をば捨ならぬ秋の山かは[21]

（最勝四天王院障子和歌・三六六二・慈円）

など、月を詠みつつも既成の掛詞表現に対する関心も見せている。もっとも、こうした手法は慈円に限らず新古今時代の歌人たちがしばしば用いていたもので、

hはるのいろもいまさらしなになくさます　あきをはすてのおほろ月よに（明日香井集・雅経五四三）

をはじめ、「更級」のみの用例では、

iあらし吹く山の月影秋ながらよも更科の里のしらゆき[22]

（最勝四天王院障子和歌・三六六六・定家）

j霧晴て行すゑてらす月影を　四方さえしなと何なかめけん

（拾遺愚草・下・雑・二九四〇、報恩会　勧持品）

などを挙げることができる。おそらくは当時流行の表現となっていたものであろう。新古今時代に至り、姨捨山詠は既存のレトリックに洗練の度を加えることで、新たな美の境地を開拓したといってよい。とともに、伝統的景物たる月との関係はいっそう緊密なものとなり、姥捨山の名月は、より観念化・表象化されていくこととなるのである。

おわりに

本稿では月を詠まない姨捨山詠に焦点をあて、平安から鎌倉初期に至るまでの和歌用例を取り上げ、表現的考察を試みた。その結果、次のようなことが指摘された。

(1)　姨捨山とは不可分の景物である月を詠まず、地名を掛詞的に捉えた歌は、定頼詠①が初出とみられ、能因詠②へと継承されていった。

(2)　赤染衛門詠dは月を詠み込んではいるが、表現面では俊頼など次代の歌人詠に少なからず影響を与えたと推測される。

(3)　俊頼詠③にみるように、院政期以後は「をばすて」「さらしな」の掛詞表現が様式化され、④・⑥のように月を詠まずに「山の端」の語で月を暗示するような歌も現れた。清輔詠eは月を詠

んではいるが、③・④との影響関係が予想される。

(4) 新古今集時代に至ると、こうした掛詞表現はさらに洗練の度を加え、姨捨山詠の一類型として定着をみた。逆に、伝統的景物である月との関係はいっそう緊密度を増し、姥捨山の月は観念的映像の中で改めてその美が捉え直されるようになる。

翻ってみると、定頼が活躍した時代は勅撰集でいえば『拾遺集』成立の前後であるが、この時期はまさに和歌表現の転換期でもあった。歌枕に限ってみても、小町谷照彦氏が『「歌枕の表現機能を客観化することによって、その特異性を確認し、後の題詠形式への出発点を形成することになったと考えられる」[23]と指摘しているように、『拾遺集』では従来の歌枕表現が見直され、新たな歌枕や詠法が登場する一方、淘汰されていったものも少なくない。これは『拾遺集』のみならず当時の和歌全般についていえることであろう。そのような中、月の名所、あるいは心慰まないことの比喩として詠まれてきた「更級の姨捨山」を、歌枕の持つ記号性に注目しながら別の側面から捉えなおそうとしたのが定頼や能因らであった。それはまさに、『枕草子』の地名章段において、先行用例未見のユニークな地名が多数選択されている現象とも軌を一にしていよう。[24]名月よりも歌枕の名称そのものに関心を向けた姨捨山の詠法は、このように時代の要請の中で生み出され、詠み継がれていくことで、新たな表現類型として定着していったのである。

【注】

(1) 以下、和歌の引用は、断りのない限り勅撰集・私撰集・歌合は『新編国歌大観』、私家集は『新編私家集大成』（ともに「日本文学ｗｅｂ図書館」古典ライブラリー）に拠る。

(2) 増田繁夫氏「村上朝の名所絵屏風―屏風歌論二―」（『人文研究』三三巻一号　一九八一）では、「この屏風に画かれた（あるいは画かれる予定であつた）名所は、その多くは当時の和歌によまれてゐた伝統的イメージからすれば、算賀の儀式の場を飾るに適はしいとは考へにくいものである」ことを指摘した上で、「これには、場面の選定に和歌的教養の乏しい人があたつたといつた事情があるのかも知れないが、もつぱら絵画的関心から画面が選ばれたと考へざるを得ない」とする。たしかに、当該屏風絵では老残のイメージを持つ「大荒木の森」も画題に選ばれており、『信明集』には「郭公きなくをきけは大荒木のもりこそ夏のやとりなるらし」（二八）が収められている。この名所は延喜五年（九〇五）右大将藤原定国四十賀屏風歌においても

「おほあらきのもりのした草しげりあひて深くも夏のなりにけるかな」（拾遺集・夏・一三六・忠岑、忠岑集・躬恒集）と詠まれており、『忠岑集』によれば夏の画題であったらしい。定国四十賀屏風絵に「大荒木の森」が画かれていたどうかは不明であるが、穏子七十賀屏風も「大荒木の森」を夏の画題として扱っていることから、当該屏風の名所選択にあたっては先行屏風絵もしくは屏風歌を参考にした可能性は十分予想できよう。「姨捨山」についても、現存資料からは確実な用例を探せないものの、先蹤の屏風絵・障子絵の画題として用いられた実績があり、それに倣ったのかもしれない。

(3) 『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店　一九九九）「姨捨山」の項（村尾誠一氏執筆）

(4) 「能と和歌 ―〈姨捨〉と姨捨山の和歌について」（『国文学解釈と鑑賞』七二巻五号　至文堂　二〇〇七・五）

(5) 『定頼集全釈』（風間書房　一九八九）

(6) ほぼ同時代までの用例としては、『奈良帝集』の「めてたくおほしめしける女のちかをとりしけれは、よませたまへる」（二〇詞書）のほか、『源氏物語』「総角」巻に二例が見出される。

(7) 古瀬雅義氏「藤原定頼の詠歌に見られる一特色―見立ての意外性と逆転発想技巧―」（『国文学攷』一二四　一九八九・一二）では、「意外な見立てとそれをうまく説明し尽くす逆転発想のとりあわせの妙」が、定頼の志向した「新しい詠みぶり」であることを指摘する。

(8) 『能因集注釈』（貴重本刊行会　一九九二）

(9) 「たえてとはぬ男の、さすかにこと人にものいふなりなといひてせいしけれは、その女にかはりて／君もこす人もとはすはしもつけや　ふたあらのやまと我や成なむ」（能因集Ⅰ四三）

(10) 『新日本古典文学大系　平安私家集』（岩波書店　一九九四）

(11) 小町谷照彦氏「能因における〈すき〉の旅」（『国文学』一八巻九号　学燈社　一九七三・七）は、当該歌について「能因は名所歌枕の類型である信濃の姨捨山の月と重ね写しにして伊予の月を見ているのであり、その姨捨山の月は旅の体験により能因の脳裏に強烈に印象づけられたものなのである」と述べ、能因が奥州下向時に姨捨山周辺を訪れた経験があったことを指摘する。滝澤貞夫氏「『能因歌枕』と『名所歌枕』の比較」（『名所歌枕　本文の研究』笠間書院　一九八六所収『王朝和歌と歌語』笠間書院　二〇〇〇所収）

は、小町谷説を追認し、能因が再度の奥州下向の折に東北信を通過したことは「まず間違いのないところであろう」とする。

(12) 諸注は「去らじな」と「更級」の掛詞ととるものが多いが、川村晃生氏『和泉古典叢書5　後拾遺和歌集』（和泉書院　一九九一）は「地名「更科」に「さらじな」を懸ける」とし、「よにさらじな」を「決してそんなことはあるまい」と口語訳する。本稿では「去らじな」の意に解した。

(13) 『和歌文学大辞典　web版』（古典ライブラリー　二〇一三）「よも然らじな」の意ともとれる。

(14) 注13に同じ。

(15) 鈴木徳夫氏『新注和歌文学叢書8　続詞花和歌集　新注下』（青簡舎　二〇一一）は、「よもさらじな」を「決してそのようにはなるまい」と口語訳するが、語釈においては「決して去るまい、別れないだろうと「更級」（中略）を掛ける。「さらじな」は然あらじ（そんなことはあるまい）の意とも考えられる」とする。

(16) 芦田耕一氏は『新注和歌文学叢書1　清輔集新注』（青簡舎　二〇〇八）で、結句を「更級の姨捨山の悲しい月であるよ」と口語訳するが、純粋に月の美しさを詠じた先行歌も多数存在することから、本稿では姨捨山の名月の意に解した。

(17) 「藤原清輔の反伝統的詠歌をめぐって」（『島大言語文化』五一九九八・七、『六条藤家清輔の研究』和泉書院　二〇〇四所収）。

(18) 『袋草紙』上・雑談で清輔は「かの人（＝俊頼）に和漢の才同日の論に非ず」と述べている。

(19) 「更級」のみの用例では「卯の花のかきねつづきのよそめにはただぬのがほにさらしなのさと」（為忠家初度百首・遠村卯花・一七六）もある。家永香織氏は「『為忠家両度百首』における地名歌の方法」（『国語と国文学』七四巻六号一九九七・六、『転換期の和歌表現　院政期和歌文学の研究』青簡舎　二〇一二所収）で、右歌の「更級」「（布を）晒し」の掛詞が先行用例未見であることを指摘する。なお、この掛詞表現は、家永氏が挙げる「曝布／月をまつくものはたてのおりかけてよるまてぬのをさらしなのさと」（明日香井集・雅経七一〇）にも踏襲されるが、こちらは月を詠み込んでいる。

(20) 渡邉裕美子氏『最勝四天王院障子和歌全釈』（風間書房二〇〇七）は、gと⑦との表現的関連を指摘する。第二句

は渡邉氏の解釈に倣い、「よも去らじな」と「更級」の掛詞と考えた。

(22) i・jとも「よもさらしな」に「よも然らじな」と「更級」を掛ける。

(23) 「三代集の名所歌枕―古今的美学の一考察―」（『常葉女子短期大学紀要』一　一九六八・一一）

(24) 拙稿「『枕草子』地名類聚章段の背景」（『上田女子短期大学紀要』一七　一九九四・三）